

最優秀賞（釧路地方法務局長賞）

うらら

芽室町立芽室中学校 三年 阪本 桃香

「春のうららの隅田川」

中学校音楽の教科書に載っている滝廉太郎作曲「花」の冒頭部分です。この曲は私たち家族にとって忘れられない曲になりました。私の祖母はパーキンソン病と認知症を患っており、病院に入院しています。パーキンソン病は国が指定している難病で手足の震えから始まり、だんだんと体を動かすことが難しくなる病気です。進行すると寝たきりになる場合があります、認知症も伴うことがあるようです。祖母は体の動きも悪くなり、食事もとらなくなったタイミングで病院に入院することになりました。医師からは、余命一年から二年と説明がありました。

父は「おばあちゃん、寝たきりで認知症もあるから。何をしてあげたらよいだろう。」と悩んでいました。私も祖母のためにできることはないか考えました。何か美味しいものを食べてもらおうと思っても口からは何も食べられず、鼻から管を通して栄養を入れている状態です。せっかく美味しいものを食べてほしいのにそれもできないのです。少しでも気分転換できればと考えて、写真を見せても、視力が落ちてよく見えないようでした。お見舞いに行っても話をしていても私が中学生であることも覚えていなく、会話がつながらないことも増えてきました。私は祖母とどう接してよいかわからず、自分に無力さを感じて病院の部屋の隅で気づかれないように泣きました。

私は祖母が元気な時にどうしてもっと一緒に時間を大切にできなかったのだろうと後悔しました。祖母にとって私は初孫ということもあり、本当に可愛がってもらいました。思い出は、私が小さい時、一緒に祖母の家の庭先で花火をしたこと。線香花火に火を点けた時祖母の手が幼い私の手をそっと包んでくれました。いつもどんな時でも優しくあった祖母。祖母の手の温かさを思い出す度に、私も祖母の力になりたいとずっと考えていました。

そんな時、一つだけ私にできることを見つけたのです。それは歌を歌うこと。

私は、祖母がオペラの合唱団員として歌っている写真を思い出しました。父から祖母が音楽の教科書に載っているような愛唱歌曲が好きだったことも聞きました。私は認知症を患っていても、その人らしさを大切にしたり、その人の今の感情を大切にしたらいいのではないかと考えました。音楽は感情を引き出すといえます。ドラマや映画でも悲しい場面で涙が流れたりしますが、それは音楽の力で感情を引き出しているからです。先日、家族でお見舞いに行ったとき、私は歌が祖母の心に響いてほしいという願いを込めて滝廉太郎の「花」を歌いました。私が一番を歌い終えた時、それに続いて二番の歌詞を祖母が歌い始めたのです。いつも病院で話す時、元気がなく会話がつながらない祖母が生き生きと歌い出す姿を見て、私はとても嬉しくなりました。祖母らしさを考えたときに私は歌にたどり着いたのです。

それ以来、私はこつこつとお見舞いに行き歌っています。目が悪くなっても耳がある。そして感情は残っているのです。寝たきりでも認知症になってもその人の思い出や人生は消えません。「あなたは大切な存在なんだ」という気持ちを伝え続けたいと思います。

全国の認知症患者数は厚生労働省による推計によると、二千二十五年は約四百七十二万人に達するとされています。また、パーキンソン病の患者数も以前の調査で約二十八万九千人だそうです。私は将来、ゆくゆくは認知症やパーキンソン病を改善できる音楽療法士になるのが夢です。音楽療法は認知症の不安、抑うつ、行動障害といった症状に対して、リラックス効果があるのです。また、歩行困難なパーキンソン病の患者が音楽を聴くことで、リズムよく歩こうとする事例もあります。

私は祖母のような世界中の認知症やパーキンソン病で苦しむ方々に寄り添い、その一人ひとりの権利が守られるよう理解を広めたいです。私は祖母との交流を通して、どんな人にもその人らしさがあることに気がつきました。これから生きていく出会いの中で、どんな人に対しても、その人らしさを大切にできる人になりたいです。

「うらら」とは穏やかな日のこと。一人一人が相手を尊重することで、すべての人にうららかな日々が訪れることを願っています。